東北大学における授業参観の取組み

授業参観の位置づけ

本ブックレットで紹介する「授業参観」は、大学教員を目指す大学院生や若手教員が、先輩教員の実授業を参観し、ともにディスカッションを行う一連の取組みを指します。東北大学で実施している大学教員準備プログラム（Preparing Future Faculty Program: PFFP）と新任教員プログラム（New Faculty Program）[※1]の一環として、2012年度から継続的に実施してきました。この両プログラムでは、初期キャリアにいる若手教員と将来大学教員を目指す大学院生を対象に、図１に示すコンセプトに基づき、大学教員に求められる能力や知識、実践力を身につけるための場を提供しています。授業参観は、このうち「仕事を理解する」「比較の目を育てる」「先達（先輩教員）から学ぶ」にあたる重要な活動のひとつとして位置づけられています。

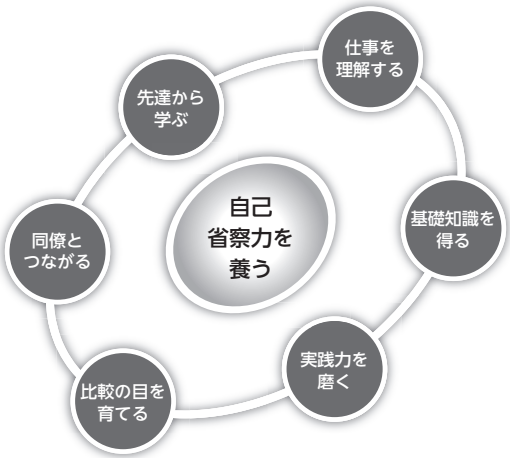

図１：大学教育準備プログラムと新任教員プログラムのコンセプト

※1　大学教員準備プログラム、新任教員プログラムについては、東北大学 大学教育支援センターのウェブサイトで詳細を公開しています。http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/

参観者は誰か

授業参観に「参観者」として参加するのは、両プログラムの受講生である大学院生（博士課程後期）とポスドク、各種研究員、そして、おおよそ教員歴８年目までの若手教員です。約９か月間にわたるプログラム実施期間において、一人当たり３回以上の授業参観を行います。

参観させてもらえる授業探し

「これから大学教員を目指す大学院生や、若手教員の勉強のために、先生の授業を見せていただけないでしょうか？」―こんなお願いを学内外にしてまわることで、この授業参観の取組みを少しずつ拡大してきました。

最初は３回、３人の教員からスタートした授業参観の取組みも、2016年度には20名の先生方の協力を得て、30回の授業を対象として実施できるまでになりました（表１）。まずは小さく、プログラムの実施主体である東北大学 高度教養教育・学生支援機構の教員や、協力教員に声掛けをして始めた授業参観ですが、プログラムの受講者数の拡大や、より多くの授業を参観したいという要望に応えるべく、毎年新たな協力者をお願いする必要があります。したがって、東北大学 総長教育賞受賞者、授業評価アンケートのスコアの高い教員へのアプローチ、学生への聞き取りなど、様々な方法で「授業を見せてくれる教員」を探してきました。引き受けて下さる方は２割にも満たない地道な取組みですが、みなさまのご理解とご協力のおかげで、様々な分野の教員に参画いただいています。

表１：授業参観のあゆみ

	参観実施回数	協力教員数	参観者数（のべ）
2012年度	3	3	18
2013年度	10	9	43
2014年度	11	10	46
2015年度	17	16	65
2016年度	30	20	108

学内だけで始めた取り組みも、2015年度からは東北工業大学、2016年度からは東北医科薬科大学の教員の方にもご協力をいただけるまでになりました。参観者にとっては、多様な授業を参観することができ、「今」の学生の姿、学習への取組みの様子を目の当たりにする絶好の機会となっています。

単に見て終わり、ではない授業参観

１コマ分90分の授業の参観と、それに引き続くディスカッション、その後のリフレクティブジャーナルの執筆までが、本取組みの基本的な構成です。授業参観とディスカッションには、プログラム運営担当者１名がコーディネーター（引率教員）として参加します。

授業参観のながれ

授業参観には、教室後方から静かに参観する「観察型」と、授業中の学生らのグループワークに参加しながら授業そのものを体験する「参加型」の２つのパターンがあります。授業の担当教員の要望に応じて、どちらかの方法で参観を行っています。

それぞれがどの授業を参観するかについては、参観者の希望に基づいて決めています。希望調査時には、授業の概要と特徴、担当教員の専

授業開始10分前に教室前に集合
↓
担当教員に挨拶，参観場所などの指示をうける
↓
授業参観（1コマ分：90分）
↓
ディスカッション
↓
リフレクティブジャーナルを書く

図２：授業参観の流れ

門、授業開講場所、日時の情報を提供しています。参観者には、なるべく自分の専門以外の授業も積極的に参観してみることをおすすめしています。

ディスカッションのながれ

授業参観後に担当教員を囲んで行うディスカッションでは、盛り上がると１時間では終わらないほど活発な議論が展開されます。参観者には、授業を見ながら気づいたこと、疑問、授業者の意図を確認したいポイントを自由に質問してよいと伝えています。

ディスカッションでは、まず授業の担当教員に謝意を伝え、参観者による簡単な自己紹介を行います。それに引き続き、コーディネーターから担当教員に、授業の概要、今日の授業の意図、やってみてどうだったか、などについて聞き取ります。ここで授業をやってみての感想を聞くのは、「いつもより緊張してしまった」「参観者がいたからか、学生が静かだった」などといった、通常の授業と比較して今日の授業がどうだったのかについて聞き出す意図があります。こうして参観した授業についての共通理解を図ったところで、参観者から自由に教員に質問をしていきます。

参観者自己紹介（名前、所属、専門）

↓

授業概要（対象、位置づけ）について確認

↓

Q:「本日の授業をやってみて、いかがでしたか？」

↓

参観者から自由に質問

図３：ディスカッションの流れ

写真：授業参観後のディスカッションの様子

リフレクティブジャーナルを書く

参観者は、授業参観後３日以内にリフレクティブジャーナル（自分の経験・体験・思考をふり返り、意図的に吟味した内容について記していく日誌）を書き、提出します。授業参観、そしてディスカッションでのやり取りを通じて考えたこと、印象に残ったこと、書き残しておきたいこと、疑問に思ったことなどを、それまでの自分の経験や教育観を交えて自由に綴ります。このジャーナルは、授業の担当教員にもお送りしています。

単に経験、体験して終わりではなく、ジャーナルを書くことで言語化し、整理する活動も重要な授業参観の一部として位置づけています。この取組みを通して、自身の価値観に気づくきっかけにもなるとの声が寄せられています。